

月報

5 1 号

発行所

青丘文庫

編集・発行★韓 哲 曠

〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1

メゾンド青丘ビル2階

TEL(078)734-5989 FAX 735-0660

在日朝鮮人史研究会 第一一七回例会

(一九八九年一月一日)

治安維持法体制と在日朝鮮人

水野直樹

治安維持法体制下での在日朝鮮人に対する弾圧については、これまで言及されることは多かったが、その実態はあまり解明されていない。治安維持法研究は近年かなり進展が見られるが、在日朝鮮人に対する弾圧・監視の体制や実態に触れた研究としては、荻野富士夫『特高警察体制史』(せきた書房)があるくらいである。

在日朝鮮人に対する治安維持法の適用には、日本人への適用や植民地朝鮮における治安維持法体制とは異なる特徴があるのではないかと考えられる。また治安維持法体制と在日朝鮮人運動との対抗関係を考察することによって、在日朝鮮人運動史を別の側面から検討することにもなる。今回は、このような視点から今後の課題をいくつかあげるとどめる。

従来の研究では、治安維持法による在日朝鮮人の検挙・起訴者数として、一九三〇年からの統計数字が知られている(朴慶植「治安維持法による朝鮮人弾圧」『天皇制国家と在日朝鮮人』所収)。しかし、実際には一九二八年に朝鮮共産党日本総局に対する弾圧・検挙がなされ、翌年には起訴されている。三〇年までに他にもいくつかの事件があり、統計そのものを再検討することが必要である。

治安維持法による弾圧の対象は、おおまかに分ければ、三〇年までは朝鮮共産党関係、三〇年代前半は日本共産党

・全協関係、三〇年代半ば以降は各種民族運動関係ということになるが、三〇年代末からは「移入労務者」つまり強制連行された朝鮮人労働者が治安維持法の対象になる。この点は日本人の場合と大きく異なる特徴といえる。

三〇年代前半の日共・全協関係者への法適用は、日本人の場合と異なるものではなかったと見られるが、他の時期には、「朝鮮独立企図」・「国体変革」という拡大解釈で治安維持法を適用されるケースが多かった。これは、朝鮮における治安維持法適用と共通するものである。

在日朝鮮人に対する監視・取り締まり体制は、治安維持法制定以前にはほぼ確立していたといえるが、一九二八年、一九三五年に内務省の「視察内規」が改められ、特高警察の拡充とともに監視体制も強化され、治安維持法による弾圧を支えるものとなった。このような体制の一環として協和会が組織されたことも、付け加えておくべきであろう。ただし、在日朝鮮人に対する監視体制の変遷を整理することは、今後の研究課題である。

転向およびそれに関わる思想犯保護観察制度、予防拘禁制度についても、日本人の場合と比較しながら実態の解明がなされねばならない。

その他、治安維持法反対運動と在日朝鮮人との関わり、敗戦直後の政治犯釈放運動に果たした在日朝鮮人の役割など、明らかにしなければならぬ課題が多い。また前述の朝鮮共産党日本総局事件の公判闘争は、在日朝鮮人運動と治安維持法との対抗関係を典型的に示すものとして注目に値する。

第三回「日韓・在日キリスト教関係史研究会」例会

1989・12・16

呉 允台著「日韓キリスト教交流史」

(1968・新教出版社)を読む

飛田雄一 後藤 聡

この本は様々な意味で「重要な古典」である。今でこそ「日韓、在日キリスト教関係史」にかかわる本はけっこう出版されているのだが、その意味で先駆的なものである。背景には65年の「日韓条約」や67年の「日本基督教団戦争責任告白」発表などがあり、「韓国」及び「キリスト教」が問い直され始めた時代といえることができる。

著者の呉 允台牧師は37年渡日以来文字通り「在日大韓基督教会」を創設し、担ってこられた。在日のキリスト者にとっではみずからの生そのものが日韓キリスト教の交流の歴史なのであろう。文章の端はしにその思いが込められているようである。

網羅的であり、課題となるべき事項について概ね記述されている。我々の研究会において今後様々なテーマが取り上げられることになるが、それは案外この本からヒントを得ることになるのではなかろうか。(例えば押川方義という人物は東北学院の創設者で後にヤマ師のような仕事をし、さらに衆議院議員になったりするのだが、最初期に「日韓同化」をとこなえるのである。少し掘り起こすことができればと思う。)

しかし、そのような評価をしつつこの本のいくつかの問題点をあげないわけにはいかない。まずいわゆる「差別用語」である。「南鮮」「鮮童」「入鮮」「啞で鰓の」などかなりの頻度で使用されている。60年代では一般的用語であったのだろうか。しかし在日の牧師の言葉として……。

もう一つ、その歴史観である。端的にいえば「キリスト教優位主義」と「反共主義」でもってすべての歴史をみようという感が強い。例えば秀吉の朝鮮侵略のさい多くの朝鮮人を連行したが「彼らはこんなみじめな死の谷の中でキリストの光にふれ」「身の不幸が転じて魂の幸いをなした」。「キリスト教の信仰は血統をこえ民族を超越する」というのである。あるいは朝鮮戦争を「ソ連の野望による北鮮軍の侵略」といいきってしまう。これは一人著者の問題だけではない。たしかにある年代のかたがたにとってはこのことは自明のことなのだろう。しかしより客観的な歴史研究としては、感情でない歴史批判として検討したいところである。この課題は当り前のことではあるが我々の研究会で用いられるべき文献は、案外それがネックになりそうでもある。

とはいえ、繰り返すがこの本は読んでおかなければならないものである。

(文責 後藤)

東欧の変革と金日成政権

朝鮮民族運動史研究会 第89回例会 1989年12月17日(日)

李 景 珉

東欧型社会に於ける最大難問の1つに、政権交代の問題がある。そこでは国家指導者が一度権力を手中に握ると長期執権者となり、自らが存命中に、そしてスムーズに、他の指導者に権力移譲が行なわれるのがきわめて稀である。スターリン、毛沢東そしてチャウシェスクがそうであった。むしろ西欧型社会に於いても、政権交代は至難のわざである。それが民主主義のルールにそって行なわれるのは、まさにごく一部の先進国でのことだ。東西を問わず、権力者にとって政権を手放すのは、よほどの勇気がいるとのことだろうか。

ソ連のゴルバチョフが、ペレストロイカ政策の一環として、最高指導者にも任期制を適用し、二期十年案を打出したのは注目されよう。フランスの場合大統領の任期が七年、二期迄可能であることを考えれば、ゴルバチョフの十年はいくぶん短い気がしないでもない。しかし、最高の権座は短いのにこしたことはない。それが長期化すればするほど、その交代は至難であり、かつ悲惨な最期を伴う可能性が大きいからである。今日ほど多様な人材の続出する時代に、個人の専横を何年も許すわけにはいかない。フランスのジンスに二期を務めあげる大統領がいけないというのがあるが、これは示唆にとんでいるといえよう。

金日成が北朝鮮で権力者として君臨して、今年で四十五年を迎える。昭和天皇ほどではないにしろ、長期政権であり、封建君主なみの権勢と安泰ぶりには驚嘆せざるおえない。去年の東欧の地殻変動があっても、それはいまだに微動だにしていないかにみえる。

たしかに北朝鮮は東ドイツでもルーマニアでもない。しかし金日成政権が、世界の動きに対して民衆の目と耳をひたすら隠しつづけられる保障はない。当面は、東欧から留学生と労働者を引上げる事で変革のうねりの波及を防ぎえたに、これからの日米との外交交渉や南北対話を進めるには、ある程度の北朝鮮の民主化は必至であり、それが北朝鮮の政権を根底からゆさぶる要因となることはあきらかである。それとも、金日成政権は、いつまでもかたくなな閉鎖主義のとりこになっているのだろうか。

さて、手元の資料を見たらチャウシェスクは平壤を四回も訪ねている。彼は一時自主独立路線に異常なまで固守していた。ソ連軍の駐留を認めず、チェコ介入に反対し、ロス五輪に東欧からただ一国参加するなど、世界の注目を集めていた。彼が平壤を訪問すれば、沿道には数十万の市民が動員され、民族衣裳、民族楽器で歓迎され、二十万人規模の平壤市民の群衆集会が開かれたりした。同じ自主独立路線を歩む同志として、金日成とは意気投合していたようである。その彼の悲惨な最期を、金日成はどう受け止めているのだろうか。

＜新図書案内＞

- 現代史資料 台湾 1、2、 山辺 健太郎 東京 みすず書房 71年 P523 P742
 日本統治下における台湾民族運動史 向山 寛夫 東京 中央経済研究所 P1324
 太平洋諸島百科事典 太平洋学会 東京 原 書房 89年 P688
 ミクロネシア民族史 松岡 静雄 東京 岩波書店 1943年 P699
 中国文化叢書 6 宗教 窪 徳忠 東京 大修館書店 1968年 P337
 中国文化叢書 8 文化史 小倉 方彦 東京 同上 1969年 P337
 中国文化叢書 3 思想史 赤塚 忠他 東京 同上 1968年 P366
 蒙古風土記 米内山 康夫 東京 改造社 1941年 P447
 満蒙事情総覧 端山 政道 同上 1932年 P702
 韓国史研究彙報 第65号 国史編纂委員会 ソウル 同所 1989年
 天学初函 1巻－6巻 呉 相和 中華民国 1978年
 盛世危言増訂新編 1－2 呉 相和 同上 1989年
 学林 第5.6号 延世大学校史学研究会 ソウル 同所 1983.4年
 朝鮮学報 第131号 朝鮮学会 奈良 同所 1989年
 間島問題－日帝秘録－ 金正柱、呉 世昌 ソウル 朝鮮資料研究所 1972年
 嶺南郷約資料集成 呉 世昌他 ソウル 嶺南大学 1981年
 国譯航山全集 曹 在奎 ソウル 成均館大学校 1983年
 趙潤趙靖先生日記 民族文化研究所 ソウル 嶺南大学 1983年
 韓国書院教育制度研究 丁 淳暉 ソウル 同上 1979年
 伝統陶磁の生産と需要 権 丙 卓 ソウル 同上 1979年
 嶺南史学－創刊号第2.3.4.号 嶺南大学校 ソウル 同上 1985-1989年
 韓国農耕歳時の形成 李 樹健 ソウル 同上 1985年

＜研究会御案内＞

－在日朝鮮人運動史研究会－ 第119回例会

日 時 1990年2月11日 日曜日 午後2時

テーマ 1920－30年代の延辺に於ける朝鮮民族の教育

報告者 藤井 幸之助氏

：場所は青丘文庫にて

－朝鮮民族運動史研究会と日韓在日キリスト教関係史研究会の例会は3月に延期。
 代わりにシンポジウム「韓国キリスト教と民族運動」を開催致します。

日 時 1990年2月17日 土曜日 午後2時－5時

韓国の若手研究者で構成される「韓国基督教史研究会」員9名は、日本の朝鮮
 支配に対する民衆の闘いとキリスト教の抵抗について研究を重ねてきた自主的
 な研究団体員です。その方達が参加されます。

：場所は神戸学生青年センターにて